

CONTENTS

HEAD LINE NEWS

- ノーベル賞受賞記念
名古屋大学レクチャーを開催 ①
- 院長からのメッセージ ②
- NEW IAR
新しい高等研究院 ③
- NEW IAR
高等研究院のミッション ③
- NEW IAR
高等研究院の学術活動 ③
- NEW IAR
高等研究院の組織 ④
- IAR INFORMATION
これまでの活動報告・ニュース ⑥
- IAR INFORMATION
活動予告 ⑪

HEAD LINE NEWS

ノーベル賞受賞記念 名古屋大学レクチャーを開催

小林 誠 特別教授、益川 敏英 特別教授および下村 脩 特別教授を
名古屋大学レクチャーとして迎える



名古屋大学レクチャーシップ表彰授与式の様子(左から平野前総長、益川特別教授、小林特別教授)



質疑応答の様子(下村特別教授)



<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp>

高等研究院は平成14年度に名古屋大学の高度な学術研究を推進するために設置されました。世界屈指の知的成果を産み出すことが、研究重点大学として、本学の最も重要な基本目標の一つであることは言うまでもないことでしょう。高度な学術研究は、学術の府としての大学に社会がまず求めることであり、それに答えることなくして、大学が社会から敬意をもった理解を得ることはできません。また、もう一つの大学の使命である教育も、こうした研究活動を基にして、はじめて可能であるといえましょう。

学術研究の最重要部はその対象とののびきならないやり取りに基づいています。したがって、真に優れた学術研究を達成する処方箋は存在しません。最善の努力を集中しても、なお僥倖を祈る他はないというのが真相ではないでしょうか。こうしたダイナミクスが学術研究の本質であるとするれば、これを推進するため高等研究院はどのような貢献が可能なのでしょう。私たちは国際諮問会議 (IAB) のアドバイス、学内の多くの研究者の意見をうかがい検討を重ねました。その結果、高等研究

学術研究の推進を目指して

院はまず学内アカデミーとして機能し、優れた研究を様々なかたちのレクチャーやセミナーとして本学の構成員に紹介し、研究の何たるかについて討議することをその活動の基本としたいと考えております。言うまでもなく、こうした活動は学内の一組織で行なうものではなく、構成員の積極的参加があって初めて意味を持つものです。各位の参加を切にお願いする次第です。

一方、研究プロジェクトの推進については、種々の制約からその件数は限られるとしても、優れた研究者を見出し、それにふさわしい実質的な支援を行なうことが大切であると考えております。また、現在行なっている若手研究者自立支援プログラム(いわゆるテニュアトラック)についても、さらに充実させると共に、各部局への展開も大きな課題としています。私たちは、こうした高度な学術研究の推進は大変困難であり、投資に見合った成果が予想できるようなものではないことを理解しておりますが、名古屋大学にとって不可欠であることも重要な事実です。どうか、高等研究院の活動をご理解いただき、支援くださるようお願いいたします。



高等研究院長
近藤 孝男
Takao KONDO

NEW I.A.R.

新しい高等研究院
<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp/>

新しい高等研究院

高等研究院は、名古屋大学学術憲章に掲げた目標をより効率的に達成するために、国際諮問委員会のアドバイスや学内の多くの研究者の意見に基づき、新たに学内アカデミーとして機能し、優れた研究の成果を名古屋大学の構成員各位に紹介していくことを活動の基本としていきたいと考えております。新しい高等研究院の活動方針は以下の通りです。

高等研究院のミッション

高等研究院は、名古屋大学の学術の発展のため以下の3つの活動を基本とする。

1. 名古屋大学の学内アカデミーとして、優れた研究を名古屋大学の構成員に紹介し、それを共有することで、学術の振興をはかる。
2. 特に優れた研究に対して実質的な支援を行い、名古屋大学の研究の飛躍的向上をめざす。
3. 若手研究者の自立支援を積極的に推進し、将来名古屋大学の中枢を担う研究者を育成する。

これらの活動を基礎とし、大学執行部に対して研究推進のための提言を行う。またグローバルCOE等のプロジェクトおよび各研究科の大学院教育に協力する。さらに、学外の高等研究院組織と交流を図りながら、名古屋大学の研究を広く社会に発信する。



高等研究院の学術活動

■レクチャー、セミナー、講義

名古屋大学に真に優れた研究を紹介し、学術の振興をはかるため、以下の講義等を開催する。

1 名古屋大学レクチャー

名古屋大学の最も重要な学術講義として位置づけ、学外にも積極的に公開する。世界トップレベルの研究者を招へいし、名古屋大学総長がホストとしてレクチャシップを授与する。

2 高等研究院レクチャー

学内教員、大学院生を対象とする高等研究院の最も重要な学術講義として位置づけ、学内外の特に優れた研究を採り上げ、全学の積極的な参加を要請する。学外にも公開する。

3 高等研究院セミナー

若手研究者、大学院院生の研究推進のためのセミナーとして、最前線の研究、研究の個人史、研究倫理と公正研究等を採り上げ、若手研究者の研究活動を支援する。

4 高等研究院初年次講義「学問の面白さを知る」

初年次学生(1年生)を対象とし、アカデミーメンバー、高等研究院教員、院友、学内教員等の講義で構成され、学問の面白さや研究に対する心構えを知ることが目的とする。

■研究推進

1 アカデミー研究室

アカデミーメンバーの希望に応じ、研究室、実験室、談話室等を準備するとともに、関連部局の協力も依頼しながら、研究・教育活動を支援する。

2 高等研究院研究プロジェクト

特に優れた学内外の研究者を高等研究院教員として選考し、高等研究院において研究プロジェクト(プロジェクト期間:5年)を推進する。候補者の推薦はアカデミーメンバーおよび運営推進委員の他、学内からも随時受け付ける。高等研究院会議で候補者を調査、審議し、プロジェクト提案を依頼し、ヒアリング、アカデミーの承認を経て採択する。高等総合研究館において研究スペースを用意し、協力する特任教員、研究費を提供する。

3 高等研究院テニュアトラックプロジェクト

将来名古屋大学の研究を担う研究者を、高等研究院テニュアトラックプロジェクト教員として、採用し、支援する。セットアップ費用、研究費等を支援し、高等総合研究館において研究スペースを確保する。

高等研究院の組織

名誉院長



理化学研究所理事長・名古屋大学特別教授

野依 良治

2001年 ノーベル化学賞受賞
不斉合成法の確立



ICSU会長・名古屋大学名誉博士

李 遠哲

1986年 ノーベル化学賞受賞
化学反応素過程の動力学の解明

高等研究院アカデミー



名古屋大学特別教授

赤崎 勇

2004年 文化功労者顕彰
青色発光ダイオードの発明



名古屋大学特別招へい教授

飯島 澄男

2009年 文化勲章受賞
カーボンナノチューブの発見



大学院文学研究科特任教授

佐藤 彰一

2002年 日本学士院賞受賞
テキスト科学の創始



理化学研究所理事長・名古屋大学特別教授

野依 良治

2001年 ノーベル化学賞受賞
不斉合成法の確立



名古屋大学特別教授

益川 敏英

2008年 ノーベル物理学賞受賞
小林・益川理論の提唱



名古屋大学特別教授

小林 誠

2008年 ノーベル物理学賞受賞
小林・益川理論の提唱



名古屋大学特別教授

下村 脩

2008年 ノーベル化学賞受賞
緑色蛍光タンパク質(GFP)の発見

高等研究院教員

タイプ1(世界最高水準プロジェクト研究)教員

所属部局・職名/氏名	研究プロジェクト名	採択年度
医学系研究科・教授 貝淵 弘三	細胞の極性形成を制御する分子機構の解明	平成19年度
理学研究科・教授 篠原 久典	新規ナノカーボン物質の創製、評価と応用	平成19年度
理学研究科・教授 福井 康雄	サブミリ波からテラヘルツ帯に至る宇宙と地球大気の開拓的観測研究	平成19年度
理学研究科・教授 森 郁恵	行動基盤となる神経回路の分子生理学	平成19年度
物理科学国際研究センター・教授 阿波賀 邦夫	分子磁性体における非線電子物性の開拓	平成19年度

タイプ2(萌芽的・独創的な若手プロジェクト研究)教員

所属部局・職名/氏名	研究プロジェクト名	採択年度
理学研究科・教授 山口 茂弘	有機 π 電子系材料の新機能発現	平成18年度
太陽地球環境研究所・准教授 関 華奈子	比較惑星学的視点の導入による固有磁場強度が地球周辺宇宙環境に与える影響に関する研究	平成18年度
法政国際教育協力研究センター・准教授 林 秀弥	情報通信事業分野における「競争評価」の理論的・比較法的研究	平成19年度
理学研究科・准教授 戸本 誠	エネルギーフロンティア実験による新素粒子の発見	平成20年度

高等研究院会議メンバー

高等研究院長 大学院理学研究科 教授 近藤 孝男	大学院情報科学研究科 教授 石井 健一郎	大学院環境学研究科 教授 黒田 達朗
高等研究副院長 大学院生命農学研究科 教授 坂神 洋次	大学院理学研究科 教授 杉山 直	大学院医学系研究科 教授 高橋 隆
高等研究院専任教員 准教授 蔡 大鵬	高等研究院専任教員 准教授 斎藤 進	大学院教育発達科学研究科 教授 野口 裕之
	大学院工学研究科 教授 福田 敏男	
	副総長(研究・国際企画関係担当) 物質科学国際研究センター 教授 渡辺 芳人	

これまでの活動報告・ニュース

2008年ノーベル物理学賞受賞記念 名古屋大学レクチャー

「宇宙と物質の根源「対称性の破れ」のあなたに」を開催

「2008年ノーベル物理学賞受賞記念 名古屋大学レクチャー」が、さる平成21年2月7日(土)、豊田講堂において開催されました。会場は中高生や一般市民等の参加者により1200席がほぼ満席となり、熱気溢れる講演会となりました。講演者は、2008年ノーベル物理学賞受賞の栄誉に輝かれました、共に本学理学部物理学出身の、小林 誠特別教授と益川敏英特別教授で、素粒子物理学の理論研究の発展に多大な影響を与えた「CP対称性の破れ」の問題について講演がありました。

両先生は、それまで知られていた3種類のクォークでは不十分であると考え、新たな3種類のクォークの存在を数学的に予見し、1973年の論文で発表されました。その後20年余を経て、実験によりそれらすべてのクォークの存在が確認され、2008年ノーベル物理学賞を受賞することになりました。この研究は、両先生が坂田昌一博士以来伝統のある本学理学部における素粒子物理学の蓄積を基礎に完成させたものであり、本学の誇るべき自由闊達な批判精神に富む学風の中から生まれた世界に誇る研究成果の一つであります。

レクチャーでは、平野前総長、塩谷立前文部科学大臣のあいさつの後、まず、山脇幸一理学研究科教授が、「素粒子とは」と題し、素粒子の基礎知識について解説しました。続いて、杉山 直理学研究科教授が、「宇宙進化の謎と素粒子」と題し、宇宙はなぜ反物質ではなく物質からできているかという宇宙論の大きな謎を解明するには、「CP対称性の破れ」は重要なヒントになることを分かりやすく説明しました。

それに続く名古屋大学レクチャー称号および表彰楯の授与式では、平野前総長から、小林先生と益川先生に「聖人が現れ、平和で学問が尊重される世の中になる前兆」とされる「麒麟」をモチーフにデザインした名古屋大学レクチャー表彰楯を贈呈されました。

引き続き、小林先生が、「CP対称性の破れと素粒子の模型」と題し、素粒子物理学のこれまでの流れや現状について解説し、第5、第6のクォークに関わる「小林・益川理論」の内容や実験による検証の結果等について分かりやすく講演しました。その後、益川先生が、「CP対称性の破れが我々に語ったこと」と題し、「小林・益川理論」の誕生に至る経緯について紹介しました。少年時代、坂田博士や湯川博士とのエピソードにも触れながら、研究への情熱が伝わる講演となりました。

講演後には、中高生からの質問に両先生が応答する時間を設けました。

小林先生から、「好きなことをやるのが一番良い」、また、益川先生から、「自分が本当に打ち込める問題を探してほしい」と若い世代に期待を寄せました。最後に、野依良治特別教授と近藤孝男高等研究院長から閉会のあいさつがあり、大盛況のうちに終了しました。参加者からは、「素晴らしいかった」、「良い刺激になった」との感想が多数寄せられており、大変有意義なものとなりました。



■プログラム

2008年ノーベル物理学賞受賞記念 名古屋大学レクチャー 宇宙と物質の根源「対称性の破れ」のあなたに

日時 2009年2月7日(土) 13:00~17:00

会場 名古屋大学豊田講堂

主催 名古屋大学 共催 中日新聞社

13:00~ 開会あいさつ

平野 眞一 総長

13:10~

解説「素粒子とは」

山脇 幸一 教授 (大学院理学研究科)

13:40~

解説「宇宙進化の謎と素粒子」

杉山 直 教授 (大学院理学研究科)

14:15~

名古屋大学レクチャーシップ授与式、表彰楯贈呈式

14:25~

講演「CP対称性の破れと素粒子の模型」

小林 誠 博士

15:15~

講演「CP対称性の破れが我々に語ったこと」

益川 敏英 博士

2008年ノーベル化学賞受賞記念

名古屋大学レクチャー

「オワンクラゲからのおくりもの」を開催

「2008年ノーベル化学賞受賞記念 名古屋大学レクチャー」が、さる平成21年3月26日(木)、豊田講堂において開催されました。講演者は、2008年ノーベル化学賞受賞の栄誉に輝かれました、下村 脩特別教授で、生命科学や医学分野の発展に多大な影響を与えた緑色蛍光タンパク質(GFP)の発見について講演が行われました。

下村先生は、平田義正教授以来の伝統ある天然物有機化学の薫陶を本学理学部で受け、ウミホタルの発光物質の結晶化に世界で初めて成功するとともに生物発光研究の礎を築きました。先生は、昭和35年本学大学院理学研究科で理学博士の学位を取得し、また昭和38年から本学理学部助教授として2年間在籍しました。渡米後、海中で美しく光るオワンクラゲの成分、GFPを世界で初めて発見し、その単離と結晶化、および蛍光の仕組みを解明することに尽力しました。これらの功績も含め、2008年ノーベル化学賞を受賞しました。

下村先生によって発見されたGFPを標識に使うことで、生きた細胞中のたんぱく質の動きが直接観察できるようになり、分子生物学や基礎医学の研究に飛躍的な進展をもたらしました。現在、GFPは生命科学の探究に不可欠な「道具」となっており、アルツハイマー病や、がんの転移のメカニズムの解明など医療分野にも大いに役立てられ、その発展に大きく貢献しています。

当日は、はじめに平野前総長のあいさつの後、まず上村大輔本学名誉教授・慶応義塾大学理工学部教授が、「2008年ノーベル化学賞に輝く下村 脩 博士—時を超える「ひと」、「もの」、「ところ」—」と題し、下村先生の研究の源流および生物発光の原点でもある平田研究室での人間味あふれるエピソードを交えながら、生物発光の基礎知識について分かりやすく解説しました。

それに続く名古屋大学レクチャー称号および表彰楯の授与式では、平野前総長から、下村先生に「麒麟」をモチーフにデザインした名古屋大学レクチャー表彰楯を贈呈されました。

レクチャーでは、下村先生が、「発光生物研究の原点—名古屋大学」と題し、発光生物研究のこれまでの流れや現状について解説し、GFPの発見に至る経緯について紹介しました。少年時代、平田先生との出会いや、家族ぐるみのオワンクラゲの採取等のエピソードにも触れながら、研究に対する「諦めない」熱い情熱が伝わる講演となりました。

講演後には、参加者からの質問に先生が応答する時間を設けました。下村先生から、「どんな難しいことでも、努力すれば何とかなる。絶対諦

めないで成功するまで頑張ろう。」と若い世代に期待を寄せました。最後に、近藤孝男高等研究院長から閉会のあいさつがあり、大盛況のうちに終了しました。

参加者からは、「理解しやすかった」とともに、「同様の講演を期待している」とのメッセージが多数寄せられており、大変有意義なものとなりました。



■プログラム

2008年ノーベル物理学賞受賞記念 名古屋大学レクチャー オワンクラゲからのおくりもの

日時 2009年3月26日(木) 14:00~16:00

会場 名古屋大学豊田講堂

主催 名古屋大学 共催 中日新聞社

14:00 ~ 開会あいさつ

平野 眞一 総長

14:10 ~

解説講演

「2008年ノーベル化学賞に輝く 下村 脩 博士

—時を超える「ひと」、「もの」、「ところ」—

上村 大輔 博士 (名古屋大学名誉教授)

14:40 ~

名古屋大学レクチャーシップ授与式、表彰楯贈呈式

15:00 ~

記念講演

「発光生物研究の原点—名古屋大学」

下村 脩 博士

15:40 ~

質疑応答

第1回 高等研究院レクチャーが開催された

さる平成21年3月12日(木)、医学部附属病院中央診療棟3階講堂において、第1回高等研究院レクチャーが、本学教職員・学生・一般市民など約140名の参加を得て開催されました。

このレクチャーは、学内教員、大学院生を対象とする高等研究院の最も重要な学術講義として位置づけられており、年数回程度開催するもので、今回は初回となります。

従来では、神経が損傷すると回復しないと考えられていました。しかしながら最近の研究から神経細胞は再生できることがわかり、さまざまな研究が進んでいます。今回は、神経再生医療の最新研究成果について、2名の講師による講演が行われました。

レクチャーでは、近藤孝男高等研究院長のあいさつの後、まず、門松健治医学系研究科教授が、「神経軸索再生とプロテオグリカン」と題して、脊髄損傷の治療法の現状およびプロテオグリカンによる軸索再生の阻害機構等について解説しました。続いて、岡野栄之慶應義塾大学医学部教授が、「iPS細胞を用いた神経再生戦略」と題し、脊髄損傷の根本的な治療法として期待されているiPS細胞による治療法の現状について分かりやすく講演しました。同教授が、iPS細胞を用いて、脊髄損傷で脚がまひしたマウスを歩けるまで回復させることに成功し、iPS細胞の効果を証明しました。この実験結果にも触れ、脊髄再生への応用について解説しました。それぞれの講演後には、活発な質疑応答が行われ、最後に、高橋雅英医学系研究科教授が閉会の辞を述べて終了しました。参加者から、「理解しやすかった」「これからも積極的に参加したい」との感想は多数寄せられており、大変有意義なものとなりました。



■プログラム

第1回 高等研究院レクチャー

日時 2009年3月12日(木)
会場 名古屋大学医学部附属病院 中央診療棟3階講堂
主催 名古屋大学高等研究院
14:55~15:00 開会
15:00~16:00 講演
「神経軸索再生とプロテオグリカン」
門松 健治 (名古屋大学医学系研究科 教授)
16:00~17:30 講演
「iPS細胞を用いた神経再生戦略」
岡野 栄之 (慶應義塾大学医学部 教授)
17:30~17:35 閉会

全学教養科目「学問の面白さを知る」が開講

高等研究院は、昨年度に引き続き、4月から、毎週火曜1限に、経済学部カンファレンスホールにおいて、全学部の1年生を対象とした全学教養科目「学問の面白さを知る」を開講しました。

この講義は、本学に入学したばかりの学生が、高等研究院に所属する(あるいはかつて所属した)優れた研究者の講義を聴講することにより、学問の面白さや研究に対する心構えを知ることを目的としています。

講義は3つの単元から構成されており、地球、生命、環境、材料から歴史、教育、社会までの幅広い話題について、基礎知識から最先端の内容までわかりやすく紹介し、学問を楽しんでもらうことをねらっています。毎回、定員300名いっぱいの受講生が熱心に講演に耳を傾けています。高等研究院は、この講義シリーズを自らの学術活動の一環として位置しており、同講義の専用ホームページ(http://www.iar.nagoya-u.ac.jp/Activities_Programs/IARgakumon2009.html)を開設しました。そこには、講義を担当する各先生の個人・研究室のページへのリンク、毎回の講義資料、実際の講義風景を収録した映像のファイル、写真および優秀レポートなどを公開してあります。

高等研究院全学教養科目 学問の面白さを知る

担当教員名: 高等研究院 副院長 坂神 洋次 教授

第1単元「宇宙と地球環境」

目標 人間を取り巻く宇宙・地球環境の中で、人間が生存していくためには、それらの環境について深い知識を得るとともに、それらの中から生活に必要な様々な材料を獲得している事を学ぶ。

H21.4.14 第1回

「科学、発展の法則」

益川 敏英 名古屋大学特別教授/京都産業大学理学部物理科学科 教授

H21.4.21 第2回

「驚きに満ちた宇宙」

福井 康雄 理学研究科 教授

H21.4.28 第3回

「宇宙からナノの世界へ ―ナノカーボンの科学―」

篠原 久典 理学研究科 教授

H21.5.12 第4回

「地球温暖化をどう考えるべきか」

安成 哲三 地球水循環研究センター 教授

第2单元「歴史、教育と社会」

目標 人間が歴史の中でどのように学び、それをどのようにして後世に伝え、また、どのように現代社会が運営されているのかについて学ぶ。

H21.5.19 第5回

「中世ヨーロッパの修道院文化
―古典はどのようにして現在まで伝えられたか―」

佐藤 彰一 文学研究科 特任教授

H21.5.26 第6回

「境界を越える歴史教育」

近藤 孝弘 教育発達科学研究科 教授

H21.6.2 第7回

「世界金融危機と変化する日本の金融」

家森 信善 経済学研究科 教授

H21.6.9 第8回

「アジア諸国に対する法整備支援」

鮎京 正訓 法政国際教育協力研究センター 教授

第3单元「生命と自然」

目標 人間・動物の命の営みとその自然環境との関わりについて学ぶ。

H21.6.16 第9回

「動脈硬化は18歳から始まっている」

貝淵 弘三 医学系研究科 教授

H21.6.23 第10回

「生理活性物質の化学と生物学」

坂神 洋次 生命農学研究科 教授

H21.6.30 第11回

「DNAは何故右巻きか：化学からのアプローチ」

八島 栄次 工学研究科 教授

H21.7.7 第12回

「原子・分子の流れをとらえる」

新美 智秀 工学研究科 教授

H21.7.14 第13回

「行動から脳のはたらきを知る」

森 郁恵 理学研究科 教授

H21.7.21 第14回

「科学は視ることから始まる」

飯島 澄男 名古屋大学特別招へい教授/名城大学大学院理工学研究科 教授

高等研究院研究者育成特別プログラム

(テニュアトラック制度) 中間成果報告会が開催

高等研究院研究者育成特別プログラム(テニュアトラック制度) 中間成果報告会が、平成20年12月1日(月)、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて開催されました。本学の教職員や大学院生など約100名が参加し、熱気溢れる盛況となりました。

高等研究院研究者育成特別プログラムは、2006年度より文部科学省科学技術振興調整費「若手研究者の自立的な研究環境整備促進」事業の一環として採択されたものです。本プログラムで採用した特任教員の任期は5年であり、3年目と最終年に中間審査および最終審査を行い、可となれば推薦部局のテニュア(任期なし)教員となります。本年は3年目にあたり、採用時に設定した中間目標の達成度を評価する目的で、書面審査および中間成果報告会でのヒアリングを中心とする中間評価を実施します。

報告会では、齋藤進高等研究院専任教員を司会とし、近藤孝男高等研究院長のあいさつの後、宇宙・環境分野、物質科学分野、医学分野および生命科学分野の4部構成で、13名の特任教員は、Science誌等に掲載されるレベルの高い研究成果を報告しました。最後に、坂神洋次高等研究院副院長が、閉会の辞を述べました。それぞれの講演後には、活発な質疑応答が行われ、大変有意義なものとなりました。また、今回の報告会は、特任教員間の相互理解を深めるための異分野間研究交流の機会ともなっており、学際分野の創出や共同研究などへとつながることも期待されます。

高等研究院アカデミー会員の飯島 澄男 特別招へい教授が平成21年度文化勲章を受章

高等研究院アカデミー会員の飯島澄男特別招へい教授が文化勲章を受章しました。

飯島教授は、電子顕微鏡の分解能を原子レベルにまで高め、結晶の原子配列観測に成功しました。またカーボンナノチューブを発見し、基本構造を明らかにしたことで、新材料としての産業応用の道を開きました。

飯島教授は、高等研究院の学術活動の一環として実施している、本学の全学教養科目「学問の面白さを知る」の講師を務められています。2009年度では、本学初年次学生(1年生)約300名を対象に、「科学は視ることから始まる」と題し、観察の重要性などについて分かりやすく講演していただきました。

飯島先生の今後の益々のご活躍と研究のご発展を心からお祈り申し上げます。

高等研究院アカデミー会員の赤崎 勇 特別教授が京都賞を受賞

高等研究院アカデミー会員の赤崎 勇特別教授が、「第25回京都賞」を受賞しました。

同賞は、財団法人稲盛財団により、科学や文明の発展、また人類の精神的深化・高揚に著しく貢献した方々に贈られる国際賞で、先端技術部門、基礎科学部門、思想・芸術部門の各部門があります。

赤崎教授の受賞理由は、「窒化ガリウムpn接合の先駆的実現による青色発光素子発展への貢献」であり、先端技術部門での受賞となりました。赤崎教授は、20世紀中の実現は不可能といわれていた高性能青色発光デバイスを、20年にも及ぶ粘り強い継続的な研究活動により、本学工学部教授として在職中の1989年に世界で初めてその実現に成功しました。

赤崎先生の今後の益々のご活躍と研究のご発展を心からお祈り申し上げます。

勝野 雅央 先生、吉村 崇 先生、「第5回日本学術振興会賞」を受賞

高等研究院特任講師の勝野雅央先生および高等研究院院友の吉村崇先生(大学院生命農学研究科教授、平成16年度研究プロジェクト採択)が、第5回日本学術振興会賞を受賞しました。

この賞は、日本学術振興会が、創造性に富み優れた研究能力を有する若手研究者を見だし、早い段階から顕彰してその研究意欲を高め、

独創的、先駆的な研究を支援することにより、我が国の学術研究の水準を世界のトップレベルへ発展させることを目的に平成16年度に創設されたものです。受賞対象者は、人文・社会科学及び自然科学の全分野において、45歳未満で、論文等の研究業績により学術上特に優れた成果をあげている研究者としています。今回の受賞対象となった勝野先生の研究は、「神経変性疾患の病態解明および治療法開発」です。また、吉村先生の研究は、「春を感知するウズラの生物時計の仕組み」です。

勝野先生および吉村先生の今後の益々のご活躍と研究のご発展を心からお祈り申し上げます。

高等研究院教員の貝淵 弘三 先生が、時賞利彦記念賞を受賞

高等研究院教員の貝淵弘三先生(大学院医学系研究科教授、平成19年度および平成14年度研究プロジェクト採択)が、平成21年度時賞利彦記念賞を受賞しました。同賞は、東京大学医学部にあって脳研究を推進された同氏を記念した賞で、平成11年度から設けられました。

貝淵先生の今後の益々のご活躍と研究のご発展を心からお祈り申し上げます。

高等研究院院友の上村 大輔 先生が、内藤記念科学振興賞を受賞

高等研究院院友の上村大輔先生(慶應義塾大学理工学部教授、名古屋大学名誉教授、平成16年度研究プロジェクト採択)が、第40回(2008年度)内藤記念科学振興賞を受賞しました。

この賞は、人類の健康の増進に寄与する自然科学の基礎的領域において進歩発展に顕著な功績のあった研究者に対してほう賞を授与することを趣旨とし、2007年度までに45名の方が受賞されています。

上村先生の今後の益々のご活躍と研究のご発展を心からお祈り申し上げます。

平成21年度高等研究院セミナーの活動内容について

第19回 平成21年3月16日

化学から未来エレクトロニクスに挑む

山口 茂弘 理学研究科 教授

有機トランジスタや有機太陽電池などの有機エレクトロニクスや単分子スケールで動作する分子エレクトロニクスは、未来エレクトロニクス技術として大いに期待される。本講演では、その主役となる材料の開発を目指した合成化学研究について述べる。

研究者倫理の哲学的基礎

戸田山 和久 情報科学研究科 教授

研究者倫理の哲学的基礎づけとしては、普遍的倫理への還元主義、功利主義のいずれも不十分であることを示し、徳倫理の立場からの基礎づけを与える。



人事について

山本進一総長顧問(前理事・副総長)、新美智秀教授(工学研究科)は、平成21年3月31日付で運営推進委員を退任されました。新たな運営推進委員として、平成21年4月1日から渡辺芳人副総長、黒田達朗教授(環境学研究科)、平成21年8月1日から福田敏男教授(工学研究科)にご参画いただいています。

運営費について

本院は現在のところ、学内措置による設置であるため、高等研究院運営費および研究プロジェクト推進経費を財源としています。平成20年度予算は主に高等研究院の運営費や広報費、本院の研究プロジェクト採択者、専任教員およびフェニシアトラック教員の研究支援経費に割り振られた後、有効に使われています。なお、本年度の予算執行の内訳は、2009年度の高等研究院年次報告で公表する予定です。

活動予告

名古屋大学レクチャーの開催

平成21年度には、本学名誉教授の杉浦昌弘先生(平成21年度文化功労者、分子生物学)および理化学研究所神戸研究所長、発生・再生科学総合研究センター長の竹市雅俊先生(平成16年文化功労者、平成17年日本国際賞、発生学)を名古屋大学レクチャーとして迎え、ご研究の一端を分かりやすくご講演いただくことになっております。

杉浦先生および竹市先生がレクチャーを務める名古屋大学レクチャーを平成22年3月31日(水)に、豊田講堂で開催いたします。講演の前に、理学研究科の町田泰則教授および黒岩厚教授による解説講演も予定しています。

プログラムなどの詳細につきましては、今後、高等研究院ホームページ(<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp>)とポスター、チラシなどで広く公開しています。学外にも積極的に公開します。皆様、奮ってご参加ください。

高等研究院レクチャーの開催

平成21年度には、昨年発足の本学グローバルCOEプログラムの拠点リーダーを中心に、高等研究院レクチャーを数回開催する予定です。プログラムなどの詳細につきましては、今後、高等研究院ホームページ(<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp>)とポスター、チラシなどで広く公開します。講師の先生方には、専門外の方々でもわかりやすい講演をお願いしています。興味のある方はぜひご参加下さい。

高等研究院セミナーの開催

平成21年度には、本学を代表する若手研究者を講師として迎え、高等研究院セミナーを数回開催する予定です。また、「国際化の戦略」および「研究の安全」のあり方についてフォーラム形式で議論する高等研究院セミナーを企画しています。詳細につきましては、今後、高等研究院ホームページ(<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp>)とポスターやチラシなどで全学に向けて公開します。講師の先生方には、専門外の方々でもわかりやすい講演をお願いしています。興味のある方はぜひご参加下さい。

本院に関する詳細につきましては、高等研究院ホームページ(URL:<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp>)をご参照下さい。このURLから高等研究院パンフレットもご入用になれます。



本誌に関するご意見・ご要望は高等研究院事務局までお寄せ下さい。

TEL:052(788)6051 FAX:052(788)6151

E-mail : iar@post.jimu.nagoya-u.ac.jp